

った。同じく小著ながらこちらは七十枚ばかりの図版を持っている。しかし、例えば前野良沢やコッホの肖像はあっても杉田玄白やパストールのそれはない。自作スライドで補った所のだが、これからの若い読者にぜひ推奨したい梶田昭博士の遺著となった本書も、もし図版をつけて預けたならば、どんなに魅力が増しただろうか。詮ないことながらそう惜しまない思いを、どうしても禁じ得なかったのである。

(三輪 卓爾)

〔講談社、東京都文京区音羽二―二―二、電話〇三―五三九五―三六二五、文庫判、三六〇頁、一二〇〇円〕

瀧澤 利行 著

『養生論の思想』

国民の健康づくり運動の根拠となる「健康増進法」が二〇〇二年八月に公布され、疾病予防と健康の維持・増進に向けた動きが現在、加速されている。同法は、これまでの事後処理的な医療対応が国民医療費を押し上げてきたという反省にもとづき、予防的介入を強化してゆこうというものである。

しかし、健康づくり運動も数値目標を掲げて半ば強制的なものになると、恐れにも似た感情が生まれる。というのは、劣等生であった私は中学や高校生のころ、教科担任から「何点以下だと通信簿に赤座ぶとんが付くぞ」と、よく脅され、

「赤点の者は居残れ」とか、答案返却の際に、「新村はダメな奴だ」などと皆の前で言われ、恥をかかされるペナルティを受けていたからである。

今度の国民健康づくり運動においても、健康度を示す数値目標に到れなかった者たちには、きつとペナルティが用意されることになるであろう。不到達の者、それは自己責任能力の欠落者であり、自助努力に対する怠慢という罪を犯した者と認識され、ペナルティとして保険診療の制限が用意されるのではない。すなわち、欠落度や怠慢度に応じて自己負担(自費診療)を課すという仕組みの導入である。そして、さらに……と考えるゆくと、この本の紹介からほとんど離れてゆくので止めるが、ともかくも現代は健康においても自己責任・自助努力が求められる時代となっているのである。この際、国が国民の健康を保障する義務などを負うことのなかった時代に、盛んにもはやされていた養生の教えなどを見直してみてはいかがであろうか。

そんな気持ちから本書を手にとってみたが、本書はその種の実践的な教え、健康に良さそうな美味しい話を集めたものではなかった。少し肩凝りしそうな、その意味では養生とは遠い、固くて奥の深い話の内容である。すなわち、『近代日本養生論・衛生論集成』の編者として知られる著者が、養生書を網羅的に閲読されたうえで、近世における養生思想の分類体系化をはかったものである。以下、章ごとに少し気の付いた点についてふれてみたい。

第一章は前近代における中国の養生書の概説である。研究論文の多いところであるので、もう少し丁寧な注や交通整理がほしい。また白文のままの引用史料も読み下し文にしておくべきであろう。

第二章は古代中世における日本の養生書に関する概説であるが、先学のそれを鵜呑みにされたようで誤りが散見される。たとえば、『医心方』の編者である丹波康頼を「丹波矢部郡の人で、大国の子」と記述されているが、これは「天田郡であり、父は不祥」とすべきであろう。世にある「丹波氏系図」は丹波氏の誰かが出自を高貴なものにしようと考えて、「坂上氏系図」を援用して作り上げたもので、雑な作り方をしている。系図では確かに康頼の父は大国となっているが、大国は八世紀初めの人である。康頼とは二百年の開きがあり、親子にはなりえない。

第三章は近世日本の養生書を、その刊行年によって前・中・後の三期に分け、養生書の種類と特徴を中期の貝原益軒『養生訓』を中心に論じ、第四章では近世後期の養生論を著作者の思想的立場にもとづいて後世派、古医方系、道教・神仙術系、心学系、国学・神道系、蘭学系、その他、の七つに分類し、それぞれの特徴を論じている。社会背景や時代の思想動向を踏まえた論となっているが、解釈に疑念が残る。また国学・神道系では平田篤胤の論についてもほしいところである。

第五章は養生論の表現形式に着目したもので、漢文調から和文調への移行、韻文形式や物語形式の登場には仮名草子の

影響があるとみる。教訓的な養生論から娯楽・教養的なそれへの変化は養生論の庶民層への浸透をうかがわせるという。また後期養生論の中味に関して飲食、運動、呼吸、性欲・性交、医療環境、精神衛生、その他、の七つの項目を立てて論じ、養生論が健康・長寿という狭い領域から離れて、次第に生活や人間のあり方全般を問うものへと変化している状況を語る。たいへん興味深い内容である。

第六章は近世後期養生論の複合的な性格を理解させるための社会的背景と、当時の庶民が抱いていた自然・生活・健康観を語り、結章では養生の概念を吟味している。

駆け足のたいへん雑駁な紹介となったが、養生論を論じた書の多いなかで、本書は今後、この方面に進もうとされる研究者のよき羅針盤となりうる貴重な書であることにまちがいない。そうであるゆえに、索引のないのが惜しまれる。著者には本書に続けて『近世日本養生論集成』を編集し刊行していただくことをお願いしたい。

(新村 拓)

〔世織書房、横浜市保土ヶ谷区天王町一―十二―、電話〇四五―三三四―五五四、二〇〇三年六月、四六判、三二三頁、三三六〇円〕